



文化財を未来へつなぐ

●
本田光子 Mitsuko HONDA

一般社団法人文化財保存修復学会 理事長



文化財は歴史を経て伝わる美や宝や生活・文化の証として社会が選別し、時代の心とともに世代を超えて伝えられる。日本の文化財は環境や経年の影響を受けやすい材料が多いゆえ、自然の営みと付き合いつつ保存継承されてきた。特に美術工芸品は古色や繕いの姿も美とし、目通し風通しや数十年数百年おきに修理が繰り返されてきたものである。

近代以降、伝統的保存法は自然科学に時に裏付けられ、時に修正され文化財を守り継ぐ支えの1つとなった。明治後半に酷暑の虫干しが湿度の低い秋になり、明治末には化学薬剤による消毒が始まる。大正初め、法隆寺金堂壁画の科学調査が実施された。昭和初期、東京帝大美術史教授の瀧精一は古美術品の汚損や壊滅を憂え、救うには自然科学が必要と古美術保存の研究を提唱した。理学部、工学部の教授に呼び掛け、1933年に古美術保存協議会を創設、理学部化学教室で第1回会合を開催した。同会はその後、古美術自然科学研究会、古文化資料自然科学研究会と改称し、1949年から1955年は柴田雄次（1949年日本化学会会長）が会長を務めた。当初は理系研究者の集まりだったが、1975年に古文財科学研究会、1995年に現在の文化財保存修復学会となり、文化財保存のための基礎研究を行う科学・歴史・美術・民俗等の研究者、文化財保存修復家、修復材料製作者、美術館・博物館学芸員、専門家育成の教育機関関係者、専門家を志す学生等、様々な立場の会員からなり、文化財の保存修復に関わる科学・技術の発展と普及を図っている。

科学技術の進展に伴い、文化財の分析調査や保存技術がもたらす情報や成果がより安心安全な保存につながるとともに社会的にも大きな反響を呼ぶことも多い。古美術品や発掘調査出土品から次々と得られる古代の新情報、文化財の収蔵・公開に関する美術館・博物館等の環境保全、近世までの伝統技術を基盤に近代的な修理の理念で材料を選択し、科学的調査や技術を取り入れ高度に修練されてきた古美術品の保存修理等である。

文化財の保存と修復は、物質としての文化財を可能な限り現状に近い姿で未来へつなぐ努力そのものであり、近世以前の人々は知恵と工夫と人の手で連綿と続けてきた。現代の私たちは自然科学の考え方や技術を活用し努力を続けているが、継続には社会的な理解も支えとなる。1200年以上保存継承された約9000点の宝物を守り継ぐ宮内庁正倉院事務所では、歴史や美術・工芸専門の職員とともに3名の保存科学担当職員が宝物の点検、分析調査、環境保全、虫菌害管理等に取り組み、長きにわたる代々の知見・経験を十分に共有する努力が図られている。全国美術館・博物館においても保存科学や保存修復の専門担当学芸員が配置されつつあり、文化財保存への社会的理解の深まりが実感される。

物質としての文化財を「未来へつなぐ」には「カガク（科学・化学）の力」が不可欠である。歴史を経た文化財だけでなく化学的な合成材料による近現代の文化の証も含め、文化財を安心安全に調査しさらなる知見を得ること、現状を安心安全に保存継承できる材料や技術や環境制御について、自然科学を活用したさらなる研究の発展に期待したい。

© 2025 The Chemical Society of Japan